

惜別 ―大塚先生を送る―

村 井 利 彦

先生が山手に着任したのは昭和四十八年。当初からその実力は図抜けていて、清盛的異彩を放つ存在であった。当時の山手は、長く続いた勝本学長の王朝時代が終焉し、新時代の気風が野に満ちていたころであって、先生の到来を山手の神様は待っていたのだと思う。

早々に就任した学生部長時代の印象は、巧みな手綱さばきで群雄割拠の教授会をリード、王朝後の混乱を沈静し、山手改革を成し遂げた。その後今日に至る山手体制の基礎はほとんど先生の時代に築かれたといっても過言ではない。一言あるメンバーの意見を、メモをとりつつ耳を傾け、丁寧に対応していらしかった英姿が忘れられない。いつかそのメモを覗いたことがある。絵のようなものが描かれていた。先生の茶目っ気かなとその時は思ったが、なにか幽遠な意味があるのかもしれないと今は思っている。

学長時代の功績は、なんと言っても四年制大学設立である。長年の夢、どの学長も成し遂げられなかった山手の夢を実現した。おりしも短期大学逆風が予知されていて、最後といいいいチャンスに、敢然と立ち上がり、ものにされた。先生の馬力がなかったら、山手の夢は見果てぬ本当の夢となったであろう。今は学部一学科のみの日本で一番小さい大学かもしれないが、来年には二学科になる。徐々に発展し、山手が百周年の盛時を迎えるころには、山手史の数章は先生のものである。

短大学長を任期満了すると同時に、推されて理事長に就任した。しかしながら、短大に予想通り逆風が吹きすさ

び、出身母体の日本語・日本文化学科は氣息奄々、四年制大学も新設期の苦勞尽きず、中学高校も不振という山手の法難ともいふべき時期の学園トップとして、批判を厭わず緊縮財政のレールを敷き、学園が享受した甘い體質の改善に努められた。攻めばかりではない、守りの大塚の面目も見せてくれたことは記憶に新しい。

私的な面について言えば、先生は実に無邪気で愛嬌があり、それに意外なまでに芸達者であった。こよなく愛された酒席でのおずと身につけられたものであろうか。手ぬぐい日舞、マッチ手品、なかでも面白かったのが水際漫談。研修旅行の夜、若狭の宿で聞いた「ほまえ話」には、茫然自失、聴衆全員卒倒してしまった。あれは一期一会。話芸とは、ああいうのを言うのである。謹厳実直威嚴の権化のような先生の一面しか知らぬ不幸な人々に災いあれ、である。

定年を一年残しての退職はいかにも残念だし、また突然の病魔と戦う羽目にもなって、痛恨の極みである。先生の実力にすがり続けた我等の我儘が原因ではないかと反省しきりである。が、持って生まれた先生の馬力からすれば病魔物の怪などものの数でもなからう。退院なさったら、好きな狂気の文学に遊び、地上の者など相手にせず、自由狼藉勝手氣儘、時空を超える活躍をしてくれるだろうから、今はその日を待ちたいと思う。

追記

四月五日、午後三時半、先生は逝かれた。訃報に接したのは翌日の夜である。無常は無常だから無常というのだけれども、今回ほど無常を感じたことはない。先月二度見舞ったばかり。一度は自宅。二度目は病院。小生はたわいもない冗談を言い、先生は病院裏情報の蘊蓄を披露、短かったがいつもと変らぬ愉快な時だった。あの日常性はなんだったのか。とるものもとりあえず、恐れ慎み衷心より哀悼の意を表したい。

右の事情により本号は、発行日を延ばし追悼号に変更した。昨年本学八十周年記念論文集に寄せた文章が先生の遺稿となった。本誌にこれを再掲載し、先生の在りし日を偲ぶよすがとしたい。日文学会会員読者諸賢、これを諒とされよ。

